

スリランカ・サルボダヤ運動の 「参加」を考える



宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター長 重田 康博

グローバル教育プロジェクトの一環として、私は本年3月6日から17日までスリランカ最大のNGOサルボダヤ・シュラマダーナ運動（以下サルボダヤ）を23年振りに視察した。同行者は教育学部の陣内先生だった。今回の再訪問の契機となったのは、私がサルボダヤ・ジャパンのメンバーとなり、昨年10月サルボダヤ専務理事ビニヤ・アリヤラトネ氏を宇都宮大学の講演会に招聘したことだった。今回の視察の目的は、サルボダヤの参加型開発の手法を通じて住民のプロジェクトへの「参加」のあり方をグローバル教育の観点から調査することであった。

最初に、モロトワ本部において開発理念（DESHODAYA）部門、孤児院、高等教育研究所、自己収益事業部門（家具製作、印刷、出版販売）を訪れ、各担当者からインタビューを行った。また、ヌアラ・エリヤ、キャンディ、アヌラダプラ、パブニアの各地域事務所を視察し、各コーディネーターから事務所の活動全般、参加型開発の現状、マイクロ・ファイナンス（SEEDS）、開発プロジェクトの評価のインタビューを行い、村人からも直接話を聞くことができた。

今回時間が限られていたが、訪問した村ではサルボダヤの開発理念（DESHODAYA）に基づき1段階から5段階の発展段階からなる村の参加型の開発を進めていた。訪問した村の発展レベルは、3段階から4段階レベルが多かったが、中には1段階から4段階まで30年かけてステップ・アップして発展してきた村もあった。印象的だったのは、村の住民たちがサルボダヤのプ

ロジェクトに参加した後の自分たちの生活の良き変化について生き生きと語っていたことだった。サルボダヤは設立されて50年以上が経過し、その間いろいろと試行錯誤を繰り返して発展してきたと聞いている。村人たちの「笑顔」は、サルボダヤのプロジェクトが長年の試行錯誤の上に築いてきた活動による成果の証しなのではないかと少し安心をした。

最後に私たちのスリランカ滞在中の3月11日東日本大震災が発生した。16日サルボダヤ本部に戻りバンドゥーラ国際部長から創設者のA.T. アリヤラトネ氏が同日の朝礼で東日本大震災の被災者のための祈祷をしサルボダヤのスタッフから募金を集めてくれたと聞かされた。その募金は被災地で活動する日本の仏教団体に寄付されたが、サルボダヤの好意に感謝しつつ日本への帰国の途についた。



アヌラダプラのペリミヤムクラマ村でサルボダヤが支援する
シーズ銀行を訪問して
村人と陣内先生と記念撮影